

東北 VALUE SIGHT 宮城



夏まつり仙台すずめ踊り実行委員会
実行委員長

渡辺 広幸 (わたなべ・ひろゆき)

1954年、宮城県東松島市生まれ。
宮城県仙台第一高等学校、宮城教育大学卒業後、宮城県の小学校教諭となる。在職中より仙台すずめ踊りの活動に関わり、仙臺すずめ踊り連盟副代表幹事となる。退職後の2016年より現職を兼務する。

夏まつり仙台すずめ踊り実行委員会
宮城県仙台市青葉区本町2-1-8 第一広瀬ビル4F
TEL 022-267-1040
URL <http://www.suzume-odori.com/>

両手に扇子を持ち、軽快な曲調のお囃子はやしに合わせて軽やかに跳ねる動きが特徴的な仙台発祥の郷土芸能、すずめ踊り。毎年7月に開催されている「夏まつり仙台すずめ踊り」では、団体ごとに振り付けを創作して工夫を凝らした踊りを披露している。

実行委員長の渡辺氏は、地域の発展に伴い、祭りにも町づくりの一端を担う役割が求められるようになってきたと語る。400年の歴史を持つすずめ踊りを守り伝えていくとともに、地元を盛り上げる「地域のおまつり」を目指していく。

夏まつり仙台すずめ 踊りと地域の関わり

夏まつり仙台すずめ踊りの歴史

「夏まつり仙台すずめ踊り」は、毎年7月下旬に仙台駅東口の宮城野通りで開催される祭りである。

第1回の開催は平成15年。すずめ踊り発祥400年を記し「発祥四百年記念 仙台すずめ踊り 夏の大会」として仙台市西公園で2日間開催されたのが始まりである。第3回からは会場を仙台駅東口に移し、祭りの名称も「夏まつり仙台すずめ踊り」として開催しており、今年で第16回を数える。

当初、開催を計画する時には仙台すずめ踊りの先駆者的な存在の人たちが発起人となり、「すずめ踊りによる、すずめ踊りのための、すずめ踊りのおまつり」をコンセプトに、伊達家にゆかりがあるすずめ踊りであることから第18代ご当主、伊達泰宗氏を名誉会長にお迎えして始まった。1603（慶長8）年、仙台城築城の落成祝賀の宴席で、石垣を築いた大阪・堺から来た石工たちの踊った踊りに始まり、舞い踊る姿が伊達家の紋章である「竹に雀すずめ」の雀に似ていることから「すずめ踊り」と名付けられたのである。



宮城野通り約200mをいっぱいに使った特設会場で各祭連が踊りを披露する「大流し」。

伊達家との関わりから「伊達家ご当主、伊達泰宗様に御座所への御鎮座をお願い申し上げ、各参加祭連まつら（踊りの各グループのこと）の挨拶を承る」という大流しの運行仕切りが他の祭りにはない、この祭り独特の伝統として第1回の開催当初から続いている。

夏まつり仙台すずめ踊りの変遷と現状

コンセプトが「すずめ踊りのおまつり」であったため、土曜・日曜の2日間にわたる祭りの内容はすずめ踊りが中心であった。ところが7月下旬という開催時期が仙台市内で開催される他の夏祭りや各町内会の夏祭りの日程と近いこともあり、開催が土曜日に集中するそれらの祭りの方へ1日目は人が流れ、参加者の減少につながった。その結果、1日目の土曜日の開催は小規模になり、2日間「すずめ踊りだけのおまつり」を開催することが難しくなった時期がしばらく続いた。しかし、他の祭りが日曜日まで開催されることは少ないため、2日目の方は参加者も多く、すずめ踊り中心の構成内容で、すずめ踊りが充実した「すずめ踊りのおまつり」だった。

そこで、土曜日の参加者が少ない状況を打開し、集客力を上げるために、2日間開催をより明確に打ち出した。元々、すずめ踊りの参加者自体は幼児からお年寄りまで幅広い年齢層であり、日本人だけでなく、仙台在住の外国人の方々の参加も多い。そこで参加者を増やす解決策として、ここ3年はさまざまな企画を取り入れたり、すずめ踊りの時間帯を工夫したり、土曜日を中心に開催内容の充実を図っている。具体的な方法としては、すずめ踊りだけではなく、地元地域の娯楽施設や仙台市のPR集団のス

テージ、地元企業の社員や家族、仙台駅東口を学区とする榴岡小学校の児童による大流し踊りへの参加、市内の阿波踊り団体や県内のよさこいソーラン踊り団体の演舞枠の確保、盆踊りの開催など、他団体の企画やさまざまなイベントも積極的に組み入れるようになり、参加者・来場者の数は増えつつある。

祭りのコンセプトは「すずめ踊りのおまつり」であったが、現状の課題である「土曜日の参加者が少ない」と「集客力のアップ」を解決するために「すずめ踊り以外の企画」を取り入れる工夫を進めてきた。その結果、「集客力のアップ」という点では一定の成果を収めるようになってきた。また、盆踊りの開催も「見るだけのおまつりから、参加型の要素を取り入れたおまつり」にすることで地域住民の参加者の増加につながってきた。しかし、「すずめ踊りのおまつり」というコンセプトが薄れてきているという批判も出てきているのが現状である。

夏まつり仙台すずめ踊りの今後

夏まつり仙台すずめ踊りの企画に「すずめ踊り以外の企画」を増やしていくことで確かに最初のコンセプトである「すずめ踊りのおまつり」という意味合いは薄れてきている。しかし、祭りの運営元である夏まつり仙台すずめ踊り実行委員会は、組織の主体が仙台駅東口商工事業協同組合の方々であることから、「仙台駅東口地域の夏まつり」という新たなコンセプトが生まれてきている。

仙台駅東口での開催が始まって10年を過ぎた。その間に仙台駅東口周辺も整備が進んだが、ここ3年は仙台市地下鉄東西線が開通したり、X橋が3車線

化されたりと、特に大きく再開発が進んできた。それに伴って新しい住民の急激な増加が顕著である。その結果、仙台駅東口の新たな町づくりの必要性も生まれ、「夏まつり仙台すずめ踊り」にも、その一端を担うことが求められるようになってきた。前述の盆踊りを取り入れたことは、その趣旨を反映した例の1つである。

まとめ

「夏まつり仙台すずめ踊り」も16年の歴史を刻むようになった。しかし、実行委員会を中心に運営してきたその過程は、決して順風満帆ではなく、紆余曲折を経て現在に至っている。まだまだ仙台駅東口の発展は継続していくと思うが、「夏まつり仙台すずめ踊り」は今後も時代に合わせて企画・内容を修正しながら、地域との関わりを大切に、「すずめ踊りのおまつり」という位置付けだけでなく、「地域のおまつり」という位置付けを持ちながら、祭りを続けていきたいと考えている。



幅広い年齢層の参加者に、最近では海外出身の方々も加わるようになった。